月刊・進研ニュース＜中学版＞　1996年1月号から

親切の三原則は、世界の常識

菅波　茂●アジア医師連絡協議会（AMDA）代表

すがなみ・しげる●一九四六年生まれ。医師。AMDA代表として、大震災後の神戸やサハリンでボランティアとして活躍。著書は、『遥かなる夢』『ルワンダからの証言』『飛び出せAMDA』ほか。

①a　阪神大震災とサハリン大震災

b　阪神大震災では、日本中が動いたことと、海外から温かい支援があったこと。サハリン大震災では、「親切、思いやりの心」には国境がないことが証明された。

②a　親切の三原則は、世界の常識

b　阪神大震災では、日本中の人たちが何かをしたいと思った。事実、百万人以上のボランティアが被災者救済活動に従事し、「ボランティア元年」といわれた。バブル経済崩壊による暗い雰囲気を吹き飛ばして、「将来に対する自信と希望」を与えた。少子・高齢化社会など数多くの課題を、国民がお互いに協力しあって克服していく基盤ができた。NPO法案などの整備によって、この動きは加速されるだろう。

日本は、経済大国として海外援助を実施してきたが、今回、発展途上国の人たちからも、「バナナを売ったお金を送りたい」といった温かい援助申し込みがあった。親切とは、お金の額ではなく、タイミングである。「困ったときはお互いさま」という隣近所のつきあいが、世界的マナーであることが認識された。

サハリン大震災のときに、ロシア側は、最初AMDAの救援活動を拒否した。しかし、阪神大震災被災者に対するロシアの支援へのお返しの気持ちであることを伝えると、喜んで受け入れてくれた。

まとめ。世界中のだれでも、他人が困っているときには、何かしてあげたい。その親切には国境がない。ただし、親切を受ける側にもプライドがある。これは、親切の三原則である。